

白隠禪師「坐禅和讃」

衆生本来^{しゅじょうほんらい}仏なり

水と氷のごとくにて

水をはなれて氷なく

衆生の外に仏なし

衆生近きを知らずして

遠くを求むるはかなさよ

たとえば水の中に居て

渴^{かつ}を叫ぶがごとくなり

長者の家の子となりて

貧理に迷うに異ならず

六趣輪廻^{ろくしゆ}の因縁は

己が愚痴の闇路なり

闇路に闇路を踏みそえて

いつか生死を離るべき

それ摩訶^{えん}衍^{ぜんじやう}の禅定は

称歎するに余りあり

布施や持戒の諸波羅密

念仏懺悔修行等

その品多き諸善行

皆この中に帰するなり

(075)

一座の功をなす人も

積みし無量の罪ほろぶ

悪趣いづくに有りぬべき

浄土即ち遠からず

辱^{かたじけ}なくも此の法を

一たび耳にふるる時

賛嘆随喜する人は

福を得ること限りなし

いわんや自ら回向して

直ちに自性を証すれば

自性即ち無性にて

すでに戲論^{けろん}を離れたり

因果一如の門ひらけ

無二無三の道直し

無相の相を相として

行くも帰るも余^よ所^そならず

無念の念を念として

謳うも舞うも法の声

三昧無礙の空ひろく

四智^{しちえん}円明^{みん}の月さえん

此の時何をか求むべき

寂滅^{じやくめつ}現前するゆえに

当処即ち蓮華^{れんげこく}国
此の身即ち仏なり